

新潮文庫

日 日 哀 歡

源 氏 鶏 太 著



新 潮 社

新 潮 文 庫

日 日 哀 歡

源 氏 鶏 太 著



新 潮 社 版

3352

新 潮 文 庫

日 日 哀 歡

源 氏 鶏 太 著



新 潮 社 版

3352

日
日
哀
歡

課長不在

1

課長は 昨日から大阪へ出張していて、明日の午後でないと出社してこない。課長かいな
いと、課の空気がガラリと変わってくる。それだけ課員たちの気分かのんびりしてしまうので
ある。入社して三年目の相沢公平もその例外であり得なかった。

かといって、相沢公平は 経理課長の土居を嫌っている訳でなかった。いまたに仕事のこ
とでときときこっぴとく叱られたりしているか その叱り方か 爽やかである。そのときた
けのことで、後に尾を曳くことかない。翌日は ケロリとしている。そういう意味で 近頃、
得難い課長とっていいかも知れない。

数日前にも公平は、仕事のことでミスをして、課長に見つかった。

「また やったな」

課長か口をへの字にしていた。そういうときには妙な屁理屈をこねるのは禁物であると、
公平は、過去の経験で知っていた。素直にあやまることである。

「また、やってしまいました。申し訳ありません」

「不注意による初歩的なミスだ。こんなミスは、恥と思わなければならん」

「恥 と思っております」

いつもたとそれくらいで終るところであるか その日の課長は よほと虫の居所か悪かつたのか

「君は 入社してもう四年目だろう」

と、いい出した。

「三年目です」

「そうか 三年目か。わたしは入社三年くらいにはよくこんなミスをした」

「課長でも ですか」

「そう わたしでも た」

「安心しました」

「誰か安心しろ といった。わたしのいいたいのは そんなふうだったからこのように出世か遅れている ということだ」

それは間違いのないところであつた。課長は 四十二歳の筈である。同期生の中には すでに部長代理に昇進している者もいた。課長は それを隠そうとしなかった。そういう課長でもあつた。尤も課長の昇進の遅れているのは 社内の派閥の波に乗りそこねたからたという噂かなくないでもなかった。とのようにして乗りそこねたのか、公平は知らなかった。また、今のところ社内にとんな派閥が流れているのか、知ろうとも思っていない。たかたか入社三年目くらいからそのようなことに関心を持ちたくないということでもあつたらうか。勿

論、公平は、何れ自分にも社内の派閥に無関心でいらなくなる日かくるに違いないと知っていた。サラリーマンにとって派閥は宿命のようなものである。それを避けて通ることか無理だし、不自然だとわかつていた。か、それはもっと先のことである。今からそういうことに眼の色を変えるような男にはなりたくなかった。か、繰返すようたか公平は 課長か好きであつた。

「わかつているのか わたしのいつていることか」

「てすから出世に遅れないように もっと一所懸命に仕事をしろ、と」

「その通り。とにかく出世に遅れるということは口惜しいもんだ。何れ 身にしみてわかるときかくる」

しかし 課長は 口ていうほとに口惜しかつていようてなかつた。その眼は 公平に笑いかけていようてあつた。あるいはこの課長もときときミスを繰返している公平かいくらか好きなのかも知れない。

公平か席に戻ると 隣の友田か

「随分と皮肉をいわれていたな」

と 話しかけて来た。

「皮肉」

公平には思ひかけなかつた。公平は そのように思つていなかつた。寧ろ、あのようにいわれたことか嬉しかつたくらいである。

「そうさ」

「そうかなあ」

「感しなかったのか。鈍感な奴だ」

友田は、哀れむようにいった。公平は、答えなかった。友田は、公平より二年先輩であるか、どちらかといえは要領第一と思つてゐるようなところかあつて、あまり好きでなかった。「あら、いい課長さんよ」

これも公平の隣の席の横井並子かいった。そういうことによつて公平のために弁護してゐるつもりのような。友田は、ふんと鼻の先であしらつただけであつた。か、公平は、そこに並子の自分に対するそこはかとない好意を感じた。か、今はまたそれに対して、何んとも思つていなかった。

日 日 哀 歎

何れにしても以上は、数日前のことである。今日は朝からその課長か不在であつた。やたらと煙草はかり吹かして新聞を読んでいる課員もいた。昼食に出て、二時頃に戻つて来た課員もいた。のんびりと私用の電話をかけてゐる課員もいた。今夜の麻雀の約束をしている課員もいた。公平にしたところて、一応、仕事をしているか、今夜は残業を押しつけられる心配かないし、とうして過そうかと考えていた。

勿論、公平さえその気になれば、今夜の相手をしてくれる女かいけない訳でなかつた。

突然に経理部長の引田が入つて来た。たうけていた課の空気かとたんに引き緊つた。あわてて私用の電話を切り、煙草をもみ消して、仕事にかかつたりした。

「課長は、大阪だったな」

いいなから部長は、課長の椅子に腰を掛けて、ゆっくりと課内の一人一人の顔を見るようにした。その眼が鋭くなっているのは、いち早くだらけた空気を察してのことであつたかも知れない。課員たちは、急いで顔を伏せた。公平もそのうちの一人であつた。課内は、それたけて鎮まり返つた。部長には課長にない貫禄がそなわっているということであつたろうか。

「その男、相沢公平君といったな」

「はノ」

と、あわてて起^ち上つた。

「ちよつと わたしの部屋へ来てくれ給え」

いふと部長は、さつと部屋から出て行つてしまった。公平にはとういうことか見当かつかなかつた。おんなし思ひの課員たちは

「何んたろう」

「まさか叱られるんしゃアないだろうな」

「相沢君 何か心当りかないのかね」

と、口口にいった。

「ありませんよ」

公平かいった。

「それにしても、部長、ちよつとした権幕であつたな」
「とにかく早く行つた方がいいよ」

公平は、部屋を出た。部長室へ入つて行つたことはめつたになかつた。それだけに心細かつた。こんなとき 課長のいないことが残念であつた。あの課長さえいてくれたらとういう要件でか、おおよその見当かついたであらう。何かのいい知恵をさすけてくれるかも知れない。これでは課長不在をいいことにのんひりしていた罰が当たつたような気がしてくる。

しかし 公平には、課長になら叱られることをしよつちゆうしているか、それか部長の耳にまでといていようとは思われなかつた。第一 そんな課長ではないと信じていた。とすれば、先ず叱られるのてなからう。尤も 叱られたらそれはそのときのこととして 度胸を決めて行こうと思つた。これでも男の度胸には多少の自信があるつもりであつた。

公平は、胸を張つて、部長室のノノクをした。

「おお」

公平は、部長室へ入つて行つた。

そんな公平を部長は、しばらくノロン口見ていてからいつた。

「君は いくつになつた」

「二十六歳です」

「また、独身だらう」

「はい」

「念のために聞いておくのたか、婚約者とか恋人がいるのかね」

「部長」

「何んだ」

「何んの必要かあって、そんなことをお聞きになるんですか」

「これは悪かった。厭いとなら無理に答えてくれなくってもいいんだ」

「お答えします。正式の恋人とか婚約者は いたしません。たたし」

「たたし」

「世間並の青年のやるようなことはしてあります」

「よからう」

部長は、あっさりと認めて

「ところで君は、今夜、何か用事があるのか」

「別にこさいません」

△「よかった。一つ 今夜 特別に頼まれて貰えないか」

「と、おっしゃいますと」

「年頃の娘を銀座に案内してやって貰いたいんだ」

公平にとつて まことに思ひかけない話であつた。すくなくとも叱られるのではなかつたことは有りかたかつた。

その夜、相沢公平は、上野駅に大崎麻子を迎えに行つた。大崎麻子は、会社の大株主の娘である。年頃の娘というから二十一、二歳であろう。

（とんな女であろうか）

部長は、美人の筈だ といつていた。そういう点では多少の興味を感じないでなかつたか公平にとってはあくまで一夜限りの接待役に過ぎなかつた。

麻子は、盛岡から上京してくるのであつた。大株主である父親の代理でくるのだから会社としては、それなりの接待が必要である。か 麻子は、大袈裟な接待を辞退して来た。かわりに若い社員と銀座を歩いてみたいといひ出した。そこらかちよつと変つてゐるともいえそうであるか すぐなくともいい年をした重役連中のかしこまった接待を受けるよりも 何方か気軽であることは間違ひなさそうた。そして そういう娘のわかまを許した父親は、よくよく娘を信用しているか、とつか變つたところのある人物かも知れなかつた。

たとい一夜限りの接待役にしても、公平にとつて ある程度の大役といつてよさそうである。か、問題は、公平かとうして選ばれたかということであつた。若い社員なら他にたくさんいる。眉目秀麗という点でも 品行方正という点でも 公平は、自信がなかつた。

公平は、そのことと部長に質問した。

「いや、初めは別の男を予定していたんだか、急に熱を出して欠勤してしまつたんだ」

「それにしても私か適任とは思えませんか」

「君の課長のすいせんなんだ」

「課長は、大阪にこ出張中ですか」

「だからわたしは 課長にさっき電話で相談したんだ。そうしたら君かよかろうということであつた」

「私かですか」

公平は 思ひかけなかつた。

「そう。君をた。理由をいろいろいつていたな」

「理由」

「いつてやろうか」

「お願いいたします」

「今のところ 仕事の方は またまアまアたか とつかに氣骨があつて たのもしいところがある。相当遊んでいるようたか 女を騙したり 利用するようなところかない。顔たつてお義理にも美男子とはいえないか しかし 男らしい愛嬌をそなえている」

公平は しょっちゅう自分を叱りつけている課長かそのように見てくれたのかと思うと妙な氣持であつた。

「て、わたしは さっき、經理課の部屋へ行つて あらためて君という男を見た。そして、この程度の男ならまアまアたろうと思つたんだ」

「恐れいります。しかし 私は 大崎さんのお嬢さんに気に入られるという自信がありません」

公平は 出来ることならこんな役目は辞退しておきたかった。

「特別に気に入られようと思う必要がないんだ。勿論 卑屈になることもない。そんな態度を取ったら却って軽蔑されるたけであろう。あくまで折目正しく わか社の社員として恥かしくない態度で接すればいいんだ。とこまでも社用と割り切って。たたし」

「たたし」

「失礼なことたけはないように」

「わかりました」

日 日 哀 歡
「ここに十万円が入っている。とういうことと思わぬ金がいるかも知れないから持っていたまえ」

「かしこまりました」

「とにかくわか社の大株主のお嬢さんであることだけは亡れないように」

「胆に銘しておきます」

「それから今夜のことは社内では他言無用のこと」

「はい」

だから公平は、課に戻ってから

「とんな用事だった」

「やっぱり叱られたのか」

と、聞かれたとき、

「いや、何んでもなかった」

と、軽く受け流しておいた。

か、友田だけは

「おい 何かあったんたろう。白伏しろ」

と、しつっこかった。

こういうところか友田の悪い癖である。先輩たか公平は 尊敬していなかった。

「課長か留守たとみんなさぼっている。そんなことではいかんといわれたんだ」

「君かい」

「そう、僕かた」

「ということは 部長の眼に君かいちはん目立ったんだ」

「かも知れぬ」

「やれやれ お気の毒に」

「そうなんだ」

すると 横の席の横井並子か顔を寄せて来て

「嘘でしょう」

「いや、本当だ」